

### 今回の内容

①会議情報、②ワンポイント・アドバイス、③コラム（畑村委員長）

## 会議情報

最近の、消費者安全調査委員会での議論についてお知らせします。

### 第9回消費者安全調査委員会（平成25年6月21日）

#### ○ エスカレーター事故

エスカレーター事故の評価結果の取りまとめを審議しました。

消費者安全調査委員会では、国土交通省が行った調査結果について、消費者安全の視点からの評価を行ってきましたが、様々な環境に設置されたエスカレーターが、特に危険性を意識されることなく利用されている現状も踏まえ、将来の事故の再発防止に向けて、幅広く検証を行いました。

今回の評価結果に盛り込まれた重要な点について、今後、調査委員会自らが調査を行い、更なる検証を進めたいと思っています。

評価結果については、消費者庁のホームページでご覧いただけます。

<http://www.caa.go.jp/csic/action/index5.html>

#### ○ ガス湯沸器による一酸化炭素中毒の事故

工学等事故調査部会で作業を進めている「評価書素案」の中間的な検討状況の報告がありました。

#### ○ 一般の方からいただいた「申出」事案

事務局から、類似事例、制度等の関連情報や専門委員の見解などの情報収集の結果が報告され、その内容に基づき調査委員会で検討した結果、4件については調査を行わないことになりました。残りの案件（31件）については、引き続き、臨時委員、専門委員等の知見も活用しながら、事務局で丁寧に情報収集を行った上で調査委員会において判断していくこととなります。

### 部会の動き

#### ○ 工学等事故調査部会

5月下旬、6月中旬にそれぞれ開催し、エスカレーター事故、エレベーター事故、ガス湯沸器による一酸化炭素中毒事故の評価書についての議論がなされました。エスカレーター事故については、「評価書案」の最終的な議論が行われ、第9回消費者安全調査委員会に提出することを決定しました。エレベーター事故とガス湯沸器による一酸化炭素中毒事故については、「評価書素案」について、さまざまな視点から議論がなされました。議論を踏まえ、引き続き検討を進めてまいります。

#### ○ 食品・化学・医学等事故調査部会

5月に新たに設置された食品・化学・医学等事故調査部会の第1回会合が5月下旬に開催され、調査等の対象とすべき事案について、活発な議論がなされました。

☆老朽化した消火器の破裂事故に注意

- ★屋外や軒下等、腐食しやすい環境に消火器を長期間放置していると、容器本体（特に底部）の腐食が進行し、放射操作や衝撃により破裂する危険があります。消火器は湿気を避けた適切な環境下で保管しましょう。老朽化したり腐食の進んでいるものにはむやみに触らずに、速やかに専門の事業者へ廃棄処理を依頼しましょう。廃消火器のリサイクルシステムにより、全国に回収窓口があります（2011年以前の消火器の廃棄にはリサイクル料が必要です）。以下を参考に、お住まいの近くの事業者へお問い合わせください。

（参考）消火器の取扱いについて（総務省消防庁）

<http://www.fdma.go.jp/html/life/shokaki/atukai/>

消火器の回収窓口について（（株）消火器リサイクル推進センター）

<http://www.ferpc.jp/accept/>

問い合わせ電話：コールセンター（03-5829-6773）

平日 9:00～17:00（12:00～13:00を除く）

老朽化した加圧式消火器による事故が多発したことを受け、現在は畜圧式に切り替えが進んでいます。また、2011年以降の新規格消火器は、標準的な使用期限や廃棄時の連絡先等の安全上の注意事項等がラベルに表示されています。不明な点、気になることがある場合は、お近くの消防署にお問い合わせください。



むやみに触らず、専門業者  
へ廃棄依頼を！！



クマクマ

（注）この参考情報は申出事案に関連した一般的な情報であり、申出内容に対する調査結果や回答ではありません。

# 便利になった機械と危険



消費者安全調査委員会  
委員長 畑村洋太郎

身の回りにある機械はとても便利で安全なものになりました。人が何もしなくても機械が望み通りにやってくれるのです。

身近な例を2つ挙げましょう。1つ目の例が炊飯器です。お米を洗って炊飯器に入れ、ボタンを押してしばらくすれば美味しいご飯が炊けます。しかも季節に応じて炊き上がり時間を調整してくれるので、いつも美味しいご飯を食べることができます。昔はガスコンロの上にお釜を載せて、火加減をしながらご飯を炊きましたが、約半世紀前に電気自動炊飯器が登場し、だんだんと機能が追加されて、今のように便利なものになりました。

2つ目の例がカーナビです。多くの人が自動車にカーナビを付けるようになりました。カーナビに目的地の住所、電話番号や施設名を入力すると、最適なルート画面の地図上に表示し、目的地まで案内してくれます。実際に走り始めると、位置に応じて画面の地図が移り変わり、一時停止や踏切など注意を要する場所に近付くと音声で注意を促したり、右左折が近付くと指示したりしてくれます。予め目的地の場所を地図で調べて経路を考え、地図と経路、また経路沿いや曲がり角の目標物を頭に入れてから出発する必要などなくなりました。このようなカーナビの便利さを享受するうちに、人間の頭の中は“空っぽ”になり、自動車の運転操作はできてもカーナビが故障すると目的地に行けないという、本末転倒が起きているのです。

このように機械が人間の肩代りをし、人間が考える必要がなくなるほど便利になる一方で、人間と機械が接するところでの事故も増えています。機械は発達して便利なものになると共に、その安全性も向上しました。しかし、機械を作るのは人間です。機械を作る人が考えもしなかった使い方をすれば事故が起きます。すると、機械を作る人が安全性を高めるために懸命に努力し、より安全な機械をつくれます。しかし、そうすると人間は機械がより安全なものとして扱うようになります。このように人間と機械の間で“いたちごっこ”が起きているのです。

たとえば電車のドアを考えてみましょう。ドアが閉まりかけているところに乗客が駆け込んだり、鞆や傘を挟んでドアを開けようとする光景をよく見かけます。このような行為は、電車のドアが何かを挟んだ時に開くようにした安全の仕組みを人が逆手に取っているのです。実際は、挟んだ物の大きさや位置によってセンサが感知しない場合があり、そのような場合はドアがもう一度開くこともありませんし、乗務員がその状況に気付かなければ電車は発車してしまいます。このように、利用する人間の理解と機械が実際に分担しているところがずれているところで事故が発生するのです。

今後このような事故を減らすには、機械が分担するのはどこまでで、どこにどのような危険があるかなど、機械との接し方を一人一人が理解する努力が必要だと思います。